

< 巻 頭 言 >

特集「合同臨地訓練」

西 田 茂 樹

今回の特集は、国立公衆衛生院の専門課程及び専攻課程の教育プログラムの柱とも言える「合同臨地訓練」です。

国立公衆衛生院の1年間の課程である専門課程及び専攻課程のカリキュラムは、必修科目、選択科目等のいわゆる授業、特別研究・特別演習と呼んでいる調査研究、及び合同臨地訓練で構成されています。その中で、合同臨地訓練は、他の組織、機関ではあまり類例をみない国立公衆衛生院独自の教育プログラムで、既に40年もの歴史を持っています。専門課程や専攻課程の修業生に聞くと、合同臨地訓練は、1年間の中でもっとも印象が深い教育プログラムであったと答える人が多いようです。これには、一つの事業をチームで多大な労力と時間を費やして苦勞して達成したことや、将来にわたる仲間ができたことといった良い思い出が影響しているようですが、報告書を締め切り間際に連日徹夜して書き上げたり、チーム内での討議が延々とまとまらなかったりといった負の思い出も影響しているようです。負の思い出によって合同臨地訓練が記憶されることは、当然、国立公衆衛生院の教育として良いことではありません。このような点を考慮して、かなり前に、合同臨地訓練とは何か、合同臨地訓練は教育として何を目的とし、どのような内容をどのように実施していくべきか、合同臨地訓練として適切な時間数はどの程度かといったことを、公衆衛生院内に設置された委員会で議論したことがあります。それまでに実施した合同臨地訓練のテーマや内容、そして教育効果等について検討したのですが、いろいろなテーマ、内容で実施された個々の合同臨地訓練それぞれに教育として優れた点があると考えられ、結局、異なった職種の学生でチームをつくり、現場でのテーマに取り組むという、合同臨地訓練の原則を確認するにとどまりました。すなわち、合同臨地訓練には多様なテーマと方法、内容があって良いのではないかということが、当時の結論でした。しかし、それ以降も、「合同臨地訓練では結果より過程を重視していく」という申し合わせをはじめとして、公衆衛生院の職員の間で、より良き教育プログラムにしていこうという努力が続けられています。近年は若手職員も改善努力に参画しており、合同臨地訓練は将来さらに優れた教育プログラムになっていくことが期待されます。

合同臨地訓練は、現在、公衆衛生院が国際医療福祉大学とともに国際協力事業団から依頼を受けて行っているケニア医療技術訓練学校 (Kenya Medical Training College) への国際協力を通じて、同校の教育プログラムの一つとして採用されるようになっています。今回の特集は、同校での合同臨地訓練の成果を「公衆衛生研究」に掲載してほしいとの希望が端緒となり、この機会に本家の国立公衆衛生院の合同臨地訓練を紹介しようということから企画されました。内容は、合同臨地訓練についての説明と、近年実施した3例の合同臨地訓練の内容紹介及び修業生とフィールドの担当者、指導教官のコメント、ケニアでの合同臨地訓練の紹介となっています。実は、当初企画した段階では、公衆衛生院の合同臨地訓練をもう少し豊富な内容で紹介する予定でしたが、残念ながら、組織再編の準備や和光市への移転作業の影響を受けて、予定より少ない内容となってしまいました。合同臨地訓練は、和光市へ移転し、国立保健医療科学院となっても、国立公衆衛生院時代とかわらず引き継がれていきます。何年か後に、国立保健医療科学院の新しい雑誌において、再度、合同臨地訓練の特集が企画され、さらに発展した合同臨地訓練について詳しい報告ができることを期待しています。